

20章：歴史的な理解
過去を超えて、現在の中へ
Historical Understanding
Beyond the Past and into the Present

担当：池尻良平（東京大学大学院情報学環）

ikejiri@iii.u-tokyo.ac.jp

■著者情報

著者名：Veronica Boix-Mansilla

研究関心：グローバルコンピテンシー、専門家—教師—若者の間の学際的な研究や教育、世界を理解するための教科としての歴史や生物や芸術領域の学習や教授

経歴：（経歴の詳細は不明）。現在ハーバード大学に所属。

本書の発行当時はハーバード大学の”Project Zero”の Principal Investigator and Steering Committee member を務めていた。他にも Asia Society や Association of American Colleges and Universities や Council of Chief State School Officers のアドバイザーの経歴もある。



■重要な用語

- ・ historical difference（歴史的な違い）
- ・ historical modes of thinking（歴史の思考モード）

■議題

- ①ホロコーストとルワンダの組み合わせはどのような思考回路で生み出せるのか
- ②うまくできている生徒の特徴を抽出して評価軸を作る仮説生成型の実践研究のフレームは、今後日本でも増えるであろうルーブリックを使った授業実践と相性が良さそうだが、研究者はどういう形で連携できうるのか？（詳細評価、仮説検証、開発物の組み合わせ等）

概要：

現在を理解するために歴史の理解を用いる際の評価軸を作成する ‘Assessing Historical Understanding’ というプロジェクトを中学生に実施し、歴史上で学んだ事象を生徒がどのように現代の事象に応用させるかを分析した上で、その評価軸を作成している。

■イントロダクション (pp.390-393)

- ①過去における特定の発展は、現代の事象と2つの主流な、しかし相互に排他的ではない方法によって結びつけられる
→物語による結びつけ＝長時間の継続と変化の糸と関連させることで、
研究下における現在に対して過去をその先行事例として描く
→比較による結びつけ＝過去と現在をやや離散的なケースとして対比させる
- ②物語アプローチと比較アプローチの両方の根底にあるものは、時代間や社会間における継続と変化、類似と差異について同定するスキル
- ③比較アプローチは長時間における2つの特定の变化プロセスを考慮に入れることを要求するので、より骨が折れる

■ホロコーストを理解する (pp.393-394)

・ホロコーストの場合の反ユダヤ主義という考え方は、宗教的にキリスト教と異なるという理論的、心理的な違いが根底にあった。そこに20世紀初頭におけるベルサイユ条約の圧力、ハイパーインフレーション、ゲルマン人の抑制がきかないワイマール共和国という背景が重なった結果、権力獲得に近づくためにナチが反ユダヤ主義の感情を打ち立てた。それによってユダヤ人との他者性は人種に基づく取り戻せない特徴に変形し、そこに近代のテクノロジーが合わさることでホロコーストの大虐殺が進められた。

■ホロコーストを超えて：1994年のルワンダのジェノサイド (pp.394-398)

・ルワンダにおけるフツ族とツチ族は、長い間言語と宗教を共有しているためにホロコーストのケースとは異なっている。彼らの他者性は経済的な貧富の差と、政治的な位置付けにあった。これは両民族の対立関係を狙った植民地政策によるもので、より白人に近いツチ族が支配的地位に、フツ族が従属的な地位にされていたのである。これに対し、フツ族が1959年に革命を起こすことで植民地時代は終わりを告げ、同時にツチ族は旧体制の経済的・政治的な象徴として扱われるようになった。ところが1991年に追放されていたツチ族の軍が再入国したことと、1994年にフツ族の大統領が暗殺されたことがきっかけとなり、自己防衛をするべきだという急進的なフツ族によって、ツチ族と穏健なフツ族への断続的な虐殺が始まった。

■ルワンダを考えるためにホロコーストを用いる (pp.398-402)

- ①公立中学校の第8学年(12-14歳)25人と、私立中学校の第9学年(13-16歳)10人を対象にプロジェクトを実施

- ②まず6～10週間でホロコーストに対する知識や様々な因果関係を教える
- その後3日間でルワンダの虐殺に関する導入的な内容を教える
 - その際、ホロコーストを生じさせた状況について書かせ、
両者の共通点と差異を考えるよう促す
 - その後は、以下の4セクションに区切られた活動をさせている。なお、このタスクは公立学校では3度の40分授業で、私立学校では2度の40分授業で実施
- 1) ルワンダのドキュメンタリービデオと事件の時系列を見せた後に、
フツ族がツチ族の虐殺に巻き込まれた理由の仮説を立てさせる。
 - 2) ドイツとルワンダで用いられたプロパガンダの重要な共通点と差異を発表させる
 - 3) ルワンダ人のツチ族の女性の伝記を与え、虐殺の各過程で彼女にとって妥当な選択肢は何だったかの仮説を立てさせる
 - 4) 仮説を立てることによって浮かび上がった疑問を発表させ、その疑問を解消させる
探求方法を示させる

■ルワンダのジェノサイドに対する生徒の理解の評価 (pp.402-410)

- ①一連の実践における生徒の回答を収集
 - ②教師と共同して各セクションの回答を4つのレベルに分類
 - ③その上で歴史的知識をうまく応用している生徒の特徴を抽出
- 歴史的知識の現代社会への応用に対する4つの評価指標を導出

(1) 比較ベースを構築すること

- ・事象の状態に対して(単純化ではなく)どれだけ情報量豊かに構築できるかに関わるもの
- ホロコーストに続く相互に関連する多様な要因を考慮できる程度が評価される
- ・以下は両ケースの比較ベースをうまく構築できている生徒の回答

東ヨーロッパではすでに反ユダヤ主義、つまりプレヒトラーは存在していた。ワイマール共和国が失敗した後は、市民は従うためのより強い指導者を必要とした。

[ルワンダにおいては] 私は何百年もそこにある育ちによる偏見が見られると思っている。ここから、その人々は他者に対する差別において正義の意識を持っていたかもしれない。同様に弱い政府も見られ、その結果暴動を避けられなくなったのだろう。不幸な市民がいること、つまりおそらく経済危機のようなものがあって、薄給で貧しい扱いを受けている市民がいるとも予期している。正義を誇示する人々がその社会にいて、その集団に参加している他者に対して所属の意識を形成してもいるだろう。彼らの生活の中で一部においては、差別が受け入れ可能になっているとも予期している。

(2) 歴史的な違いを認識すること

- ・完全にプロセスが一致する歴史はないという前提の下、どれだけ歴史を用いた現在への解釈を単純化させずに両者の比較を行っているかに関わるもの

- ・同時に、両ケースの表面上の類似性に対してどれだけ懐疑的になっているかも関わっている
- ・以下はホロコーストとルワンダの虐殺の違いについてうまく説明できている生徒の回答

ドイツのプロパガンダはより広まった、つまりより当然のことと思われた。彼らはそれをラジオだけでなく学校や美術においても利用した。これはルワンダでは利用されていないか、少なくとも（ビデオの中では）描かれていない。この戦略はプロパガンダをよりもっともらしいものにした。偏見をよりスタンダードなもので了解されるものに見えさせたのである。とても巧妙である……ルワンダのプロパガンダはかなり開かれていて真っすぐなもののように見える。それらは目的やゴールを隠してない。そのプロパガンダは全般的な方略というよりは「大きな暴動」の前の活気付けのトークのように見える。

（３）歴史の思考モードを応用すること

- ・歴史の思考モード、例えば多面的な因果関係を構築できるか、対立する説明を解消できるか、歴史上の人物の様々な立ち位置を考慮に入れられるかなどに関わるもの
- ・同時に、現代の歴史的プロセスについての知識は構成されたものであり、不確実で条件付きの性質を持っているものだと認識できるかも関わっている
- ・以下はこの思考モードを正しく現代の検証に応用できている生徒の回答

大きな要因はベルギーがフツ族とツチ族を分けたことである。ツチ族は全ての権力を持ち、フツ族は何も持っていなかったため、それがフツ族の目に映るツチ族を悪や貪欲なものにさせたのである。このステレオタイプは、フツ族が権力を主張するまで続いた。彼らを２つに分裂させたのはベルギーであったものの、フツ族はツチ族に対して厳しい生活をさせる条約を制定する同盟を作る代わりに、ナチがターゲットにしたユダヤ人と近いスケープゴートを必要としていた。ツチ族がルワンダに戻って来た時、不景気が生じた。これはコーヒーの市場価格が暴落したことが原因だったが、彼らへの憎しみを再燃させる必要があったのである。

（４）創造性への模索

- ・ビデオで与えられた情報の範囲を超える解釈や作業仮説を生成し、質問を作る能力に焦点を当てているもの
- ・この評価軸においては、ビデオを見ただけで出て来る基礎的な質問ではなく、ホロコーストとつながるような深い質問が重視されている
- ・以下は現代の事象に対する新しい質問を生成できている生徒の回答

虐殺は国の全ての人に知られていたのだろうか。というのも、ドイツではナチの虐殺は全ての場所で知られていたわけではないからである。

■生徒の理解を高める（pp.410-412）

■理解と評価を改定する（pp.412-413）

- ・今回のような評価を行うことによって、生徒自身は彼らの理解を公にできる
→これによって教師も生徒の達成や困難な誤概念を同定でき、追加的な学習経験のデザインすることができる